



昇段レポート



奥田洋久 初段 (岐阜太田道場)

～2021年12月12日 取得～

この度は、昇段審査の機会を与えて頂き、ありがとうございました。
太田師範、道場生の皆様に感謝致します。

小学校から高校まで野球をやり、20代で東濃リーグ社会人サッカー、30代からは市民ランナーとして走ることに没頭していました。

ある時、新聞に山崎照朝氏の記事が一週間ぐらい連載されていて空手に興味を持ち、空手バカー代の漫画も読み、更に興味が湧いてきました。そして50代直前で選んだのが極真空手です。単純な理由で入門したのですが、これがとても厳しく辛く、続けていけるかが不安でした。出来なかったことが出来るようになり、稽古にも少しずつ付いていけるようになり、型も出来るようになると面白くなってきました。

しかし、仕事の都合で早く行けず基本・移動の稽古ができませんでした。その時師範が「他の稽古はいいから基本をやりに来い」と言われたのが印象に残っています。そして驚いたのが黒帯の人が色々な準備や後片付け等をやり、叱られるのが黒帯中心、黒帯の責任を感じました。自分のイメージではもっと恐ろしいのを想像していましたが、極真精神の「頭は低く目は高く、口謹んで心広く、孝を原点とし他を益す」素晴らしい精神だと思いました。この精神が世の中に広がればいい世の中になるのと思いました。

また、大山総裁の座右の銘に「武の道においては真の極意は体験にあり、よって体験を恐るべからず」とありました。自分の理解としては、大会に出て経験することだと思い、出られる大会は出るようにしました。型の試合では、少しでも間違えば勝てない、いつでもどこでも完璧にやれるぐらい稽古しないと勝てないし、それに気合、速さ、力強さがなければ勝負にならないと実感しました。

初めての組手試合では、相手が分からない恐怖心がありました。戦う前に不安と、重圧に負けてしまっている自分がいました。太田師範からは「帯の色は関係ない、負けても前に出て負けろ」という言葉をいただきました。

何もわからず夢中でパンチを出しましたが、スタミナが切れてしまいました。

そして何度も試合に出ることで、下がらない、腹をたたかれても倒れないことを意識しました。その中で、怖さ、緊張感、痛さ、苦しさ、喜びも体験できました。

空手をやって感じたことは、自分との闘いでした。稽古も日々の稽古を全力でやる、そして試合に出るためには自分を律しながら稽古に励み、体のコンディションを整えることも、すべて自分との闘いでした。

審査会ではいつもの稽古がいつも通りできるかが不安でした。

特にスタミナが心配でした。型も回転移動も自分なりにやれることが出来ました。

10人組手では一人終えるごとに道場生の方々の拍手がしっかりと聞こえ力になりました。もう一度初心に帰り、基本を大切にして、極真空手を通じて体は衰えても、心は衰えないよう日々精進します。これからもよろしくお願い致します。

押忍